

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 4 月 25 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24310185

研究課題名(和文)現代インドにおける多様性接合型の発展経路とデモクラシー 総合的・長期的視点から

研究課題名(英文) Diversity-driven path of development and democracy in contemporary India: From holistic and long-term perspective

研究代表者

田辺 明生 (Tanabe, Akio)

京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・教授

研究者番号：30262215

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,000,000円

研究成果の概要(和文)：現代インドにおける発展経路とデモクラシーを理解するための四つの視角を提案した。(1)生存基盤論的歴史観、(2)南アジア型発展経路、(3)開発民主主義への体制変容、(4)多様性のつながりへの構造変動、である。これらの視角は、西洋型発展経路および東アジア型発展経路を相対化し、南アジア型の発展経路とデモクラシーのありかたを考察していく上で基礎となるものである。

研究成果の概要(英文)：We argue that there is a South Asian path of development and democratization. Four perspectives are suggested in order to understand contemporary India. It is not a normative evaluation but an attempt to understand present India from within regional history and in globally comparative terms.

1) Livability approach: Beyond productivity approach and capability approach. 2) South Asian path of development: Diverse livability through 'segmentary participation'. 3) 'Developmental democracy': Economic liberalization, decentralization & participatory measures. 4) 'Reassembling diversities': Beyond postcolonial dichotomies

研究分野：人類学・地域研究

キーワード：インド 発展経路 デモクラシー 多様性 生存基盤 開発民主主義

1. 研究開始当初の背景

現代インドは大きく変容している。近年の経済成長は著しく、また民主化の進展とともに民衆の政治参加が着実に進んでいる。ここで注目されるのは、インドにおいて、多元的社会集団や多様な生態・文化要素の存在が、経済発展や民主化を必ずしも阻害するのではなく、反対に、それらの多様性のつながりが政治経済活動を活性化している側面があることだ。こうした現代インドのダイナミズムの源泉を明らかにするためには、民主化や経済自由化という近年の制度的な変化だけでなく、長期の歴史の中で構築されてきた地域固有の「多様性主導型発展径路」と人々の行為主体性の発揮（多元的社会集団の主体化と公共参加）に注目する必要がある。

植民地時代から 1980 年代頃までは、インドにおける政治経済的な発展の「遅れ」について、その原因を、多宗教・多民族からなる複雑な人口構成と、カースト差別や宗教紛争そして階層性に求める見解が多くみられた。つまりインドの遅れは、文化と伝統に原因があるというわけだ（ウェーバー 1974, デュモン 2001）。

ところが 1990 年代以降、インドが経済成長の軌道に乗り、社会と政治も大きく変容するなかで、現代インド研究の多くは、民主化と経済自由化という制度的変化とそこに由来すると考えられる政治経済的動態に興味を寄せるようになった（絵所 2008 年, Corbridge & Harris 2000, Gupta & Sivaramakrishnan 2011, Ruparelia et al. 2011）。しかしそこでは、環境問題や消費文化などがとりあげられることがあっても（柳澤編 2002 年, Haynes et al. 2010）、南アジア型発展径路の基盤としての生態環境を本格的に分析し、また人々の行為主体性を支える社会関係や文化的価値を、現代的な政治経済的動態との関係で正面からとりあげようとする真の総合研究はまだ現れていない。

しかるに、2007 年に始まった京都大学のグローバル COE「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究」（代表：杉原薫）では、グローバルで長期的な視野から、アジア・アフリカ地域の生存基盤持続型発展の可能性について本格的な文理融合型研究にすでに取り組んできた。さらに 2010 年に始まった人間文化研究機構「現代インド地域研究」（代表：田辺明生）の、特に京大拠点・研究グループ 1「現代インドの生存基盤持続型発展の可能性」（代表：脇村孝平）では、上記 GCOE の枠組をインドに適用しつつ総合的・学際的研究を進めてきた。2011 年 1 月及び 9 月には、インドの多様性と持続性について、申請者 6 名を中心メンバーとする国際会議を開催して、内外の参加者から高い評価を受けた。一方、田辺は、オリッサ社会の歴史人類学的な研究に基づき、現在、ヴァナキュラーな多元的協力の価値と

デモクラシーの制度を媒介することにより、低カースト集団が、多様ななかの平等を主張して、公共領域への参加権を要求する動きがあることを論じたが（田辺 2010）、この論をさらに学際的に展開して、インド全体で検証していかなければならない。

現在必要なのは、政治経済・社会文化・生態環境の全領域を視野に収めた、グローバルで総合的かつ長期的な南アジア地域理解のなかに、現代インドの変容を位置づけることである。

2. 研究の目的

本研究は、多元的接触領域としての南アジア地域の構造と動態を長期的な視点から把握し、現代インドの発展径路とその現代的展開を、特に、多様な地域のつながりと、多元的社会的集団の公共圏への参加による社会経済政治的な活性化という視点から解明すること、そしてそれを世界の諸地域との比較と連鎖のなかに位置づけることを課題とする。

1. 南アジア地域は、インド洋とユーラシア大陸の中心に位置し、湿潤と乾燥が複雑に絡み合う多様な生態環境を背景に、多元的社会的集団が接触し交流してきた多元的接触領域としての歴史を有する。その過程を、多様な地域と集団が結びつき、物質的・精神的な交換と流通によって豊かさを実現する多様性主導型発展径路としてモデル化する。

2. 現代インド内の諸地域の固有性を、生態環境・社会文化・政治経済の三側面のそれぞれの特徴とその連関において把握する。さらに地域間の競争、交換、移民（教育・就業・出稼ぎ）などによる社会経済変容と空間構造変動を明らかにする。農村、町、中小都市、大都市の新たなつながりにも着目する。これにより現代インドの動態をグローバルなネットワークによる多様性のつながりの視点から明らかにする。このつながりにおける排除と搾取の側面にも留意する。

3. 1990 年代以降のインドの経済成長及びデモクラシーの進展において、いかにどの程度、多元的社会的集団の公共領域への参加と主体化が実現しているかを検証する。特に代表政治、社会運動、教育・就業における下層民とマイノリティの動きに着目する。現在の動態を、制度変化と行為主体性の相互作用でとらえ、従来周縁化されてきた人々の参加と主体化による公共圏の構造変動の実態を解明する。全国レベルだけでなく諸地域における固有の動きに注意する。

4. 現在、世界諸地域の多元的発展径路とその関係を理解することが、グローバル化のなかで諸地域の共存・共栄を探究するうえで喫緊の課題となっている。南アジアの「多様性主導型発展径路」を、西洋の「資本集約型発展径路」と東アジアの「労働集

約型発展経路」との関係において(杉原2010)、世界史的な比較と連鎖のなかに位置づけ、その現代的意義を検討する。

3. 研究の方法

本研究は、6人のメンバーによる共同研究である。各自の専門課題についての研究を、日本での文献研究・統計分析、インドでの現地調査・資料収集、国内外での成果発表・研究交流を通じて進展させるとともに、1年に6回の研究会において徹底的な学際的対話と討論をなし、さらに共同でのフィールドワークを毎年1回行う。それを通じて、南アジアの生態環境、政治経済、社会文化の特質をそれぞれ明らかにするだけでなく、それらを総合して、南アジアの発展経路とその今日的展開について、学際的なモデル化・概念化を図る。

本研究は、経済発展と民主化を独自のかたちで実現しつつある南アジア地域の固有の発展経路に着目しながら、それがいかに当該地域の生態・社会・歴史的条件において合理性を有するのかを、他地域との比較と連鎖を含めて明らかにする。つまり未だ解明されざる、南アジア地域の固有性のなかの普遍性を明らかにし概念化することをめざす。

そこで私たちが注目するのは、南アジア地域システムのそもそもの特性であり、現代インドの経済発展と民主化においても焦点になっている「多様性のつながり」である。1990年代以降の構造変動のなかで、多様な生態・文化的特徴をもつ諸地域や、多元的な社会集団が新たにつながり、相互的な交換と交渉を活発に行うようになったことこそが、社会政治経済の活性化の源泉であるとともに、弱者の周縁化や排除という問題を生んでいる。こうした現代インドの構造変動を、歴史的・空間的に明確に位置づけるための枠組として、南アジアの「多様性主導型発展経路」という概念を提案する。このフレームワークに即して、南アジア内部の多様性とそれらの総合的な関係性を視野に収めるとともに、その構造変動を長期の時間軸において考察・検証することによって、現代インドのダイナミズムを地域史の論理に即して理解することができるだろう。

インド内諸地方は、地理生態的な違いがある他、社会文化的な固有性も加わって、現在、それぞれ特徴ある政治経済的な発展のかたちを遂げてきている。図式的に言うならば、主に三つの地帯を区別することができよう。デリー、パンジャブ州、グジャラート州、マハラシュトラ州などは、1人当たり所得と都市人口比率は高いが、出生率は低く、また6歳以下人口における性比(女児の割合)が非常に低いという「経済発展型」の地帯である。対して、ウッタルプラデーシュ(UP)州、マディヤプラデーシュ州、ビハール州などは、1人当たり所得、都市人口比率、性比は低い、出生率は非常に高いという「人口増加型」

の地帯である。現在、後者から前者の地帯に対して、豊富で安価な移民労働力と経済需要拡大がもたらされており、いびつな発展を補完的に支えている。一方、南インドのタミル・ナードゥ(TN)州、アンドラ・プラデーシュ州、カルナータカ州、ケーララ州は、経済発展が進み出生率も低いながら性比は高いという、比較的バランスのとれた「生存持続的発展型」の地帯であるといえよう(Census of India 2011、佐藤2011)。

地理生態的な特徴と、技術発展と制度構築のプロセス、そして、それぞれの地域で歴史的に形成されてきた社会関係や文化的価値をベースとした人々の行為主体性という三つの側面から、インド諸地方の政治経済的発展のあり方を総合的に捉え直す。また、現代インドの補完的・複合的な地域構造を把握するために、個別事例を全体的連関のなかに位置づける。経済発展型からデリーとグジャラート州、人口増加型よりビハール州、UP州、生存持続的発展型からチェンナイとTN州を、また、パターン外の地方として、オリッサ州とウッタラーカンド州をとりあげ、統計的な分析とともに、学際的な共同フィールドワークを通じて、それらの固有の発展のかたちを総合的に、かつ他地方との関係(特に人、モノ、カネの移動)においてとらえる。

なお各メンバーはそれぞれの専門課題を通じて、全体的な理論枠組みへの貢献をする責任を有する。メンバー6名をコアとして、日本で国際会議を数回開催するほか、外国の学会等でパネルを組んで成果発表する。最終年度の国際会議の発表内容を中心に、日本語と英語で論文集を刊行する。

4. 研究成果

現代インドにおける発展経路とデモクラシーを理解するための四つの視角を提案した。(1)生存基盤論的歴史観、(2)南アジア型発展経路、(3)開発民主制への体制変容、(4)多様性のつながりへの構造変動、である。

(1)生存基盤論的歴史観は、生産効率性の向上ではなく、人間の生存基盤の拡充こそが長期的歴史を特徴付けてきたと考える。人びとが、食糧、住居、衛生などの基礎的な生存基盤を確保し、ついで識字能力を身につけて、政治経済社会的な行為主体として活動するに至る過程が重要である。諸地域の生存基盤は、それぞれ固有の自然環境と人間文化の相互作用のもとに成立した。この視点からインド世界は、外部に常に開かれた「開放性」、いろいろな生態と文化が関わり合って維持されてきた「多様性」、異質な原理をもつ諸組織及び諸集団をゆるやかにまとめあげてきた「階層性」と「多中心性」によって特徴付けられる。

(2)デモクラシーの深化と市場経済の活性化は、開放性、多様性、階層性、多中心性

という性格をもつ 南アジア型発展径路 がその潜在力を現代的な形で発揮したことから生じている、と私は考えている。それが可能になったのは、多様な社会集団が政治経済社会的な行為主体として活発に活動するに至っているからだ。識字率は独立後急速に上昇し、近年では特に下層民、低開発州、女性の識字率向上が著しい。識字力の向上によって行為主体性を高めた諸民衆は、“分節的(セグメンタリー)な参加と分有、”という地域固有の社会原理に立って公共参加を推進しながら、従来の差別構造を厳しく批判し、多元的な社会集団のより平等かつ公正な生活機会(ライフチャンス)の保障を求めている。

(3) 現代インドにおける南アジア型発展径路の一九九〇年代以降の政策的展開を、ここでは 開発民主制 として理解することを提唱する。それは民主制もとの開発主義を指すのではなく、多様な人びとの公共参加(政治経済活動)の機会を保障・拡充することを通じてデモクラシーの深化と経済発展を同時に達成することを目指す体制を指す。その具体的な内容は、「市場化・分権化・参加保障」の三点セットからなる。国家の役割は、市場経済を拡充するインフラ整備と、生存基盤を拡充する生態社会条件の整備におかれる。国家主導の開発政策を見直しつつ、しかし、市場の論理だけに任せるのではなく、人びとの多様な生存基盤拡充の要求に応えつつ、その人びとのダイナミズムと力をデモクラシーの深化と経済発展へと向けようとする政策である。

4) こうした体制変化のもと、インドの開放性・多様性・階層性・多中心性といった長期的な特徴は現代的なコンテキストのもとで新たな変貌を遂げている。そのなかで、ポストコロナル状況において従来は認識的にも実質的にも対比的に分断されていた “都市と農村、” “国家と社会、” “中央と地方、” “エリートとサバルタン、” “グローバルとナショナル、” “フォーマル・セクターとインフォーマル・セクター、” などの二元論的構造は溶融し、新たなつながりをもちつつある [水島 第二巻序章、上田 第三巻 第三章、岡橋 第四巻序章、三尾 第六巻序章]。そこでは既存の区分やカテゴリーをこえて多元的な社会構成や物資や言説などがまじわりあう事態が生じており、それが政治経済的にも社会文化的にも新たな動態を生んでいる。これは、ポストコロナル的な二元論的構造から、グローバルでハイブリッドな 多様性のつながり への構造変動としてとらえることができる。

これらは、総合的・長期的視点から得られた新たな現代インド像であり、国際的なインパクトがあることが見込まれる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 77件)

田辺明生 2015年「民主主義の拡大と再編—ヴァンキュラー・デモクラシーの台頭」長崎暢子・堀本武功・近藤則夫編『深化するデモクラシー』シリーズ現代インド3 東京大学出版会 27-49頁。

田辺明生 2015年 現代インドにおける宗教と公共圏 島園進・磯前順一編『宗教と公共空間』東京大学出版会 235-260頁。

Kaoru Sugihara, “Global Industrialization: A Multipolar Perspective” J.R. McNeill and Kenneth Pomeranz eds., Cambridge World History Vol. VII: Production, Connection and Destruction, 1750-Present: Part 1 Structures, Spaces and Boundary Making, Cambridge: Cambridge University Press. 2015, pp.106-135.

藤田幸一 2014年 「農業後進性の要因分析」(ビハール—農業停滞による貧困化)、「西ベンガル—土地改革は何をもたらしたか」「開発行政と農村社会」「インド農業の現段階」柳澤悠・水島司編『激動のインド第4巻 農業と農村』日本経済評論社 233-50, 268-71, 273-301, 305-357, 389-422

Fujita, Koichi 2014 “How Agriculture in Bihar Lagged Behind: Implications for Future Development”Tsujiita, Y. ed., Inclusive Growth and Development in India: Challenges for Underdeveloped Regions and the Underclass, Palgrave Macmillan, pp.40-73.

中溝和弥 2014 “Poverty and Inequality under Democratic Competition : Dalit Policy in Bihar”Tsujiita, Y. ed., Inclusive Growth and Development in India: Challenges for Underdeveloped Regions and the Underclass, Palgrave Macmillan, pp.157-180.

中溝和弥 2014年 「危機の政治史—独立インドにおける危機の克服」『年報政治学 2013-I I 危機と政治変動』62-85頁。

NAKAMIZO, Kazuya 2013 “Political Change in the Bihar — Riots and the Emergence of the ‘Democratic Revolution’- ” Lall, Sunita and Shaibal Gupta (ed), Resurrection of the State A Saga of Bihar — Essays in Memory of Papiya Ghosh, New Delhi, Manak Publication, pp.69-108.

ISHIZAKA, Shinya, 2013 “Re-evaluating the Chipko (Forest Protection) Movement in India”, The South Asianist: Journal of South Asian

Studies, University of Edinburgh, 2(1):9-27.

Fujita Koichi, 2013, Growth and Stagnation of Agriculture in Eastern India and Bangladesh, The Brown Journal of World Affairs, XX(I): 179-190.

〔学会発表〕(計 87件)

Koichi Fujita“Toward Sustainable Development of India and South Asia: Population, Resources, and Environment”

2016年3月1日 Tamil Nadu Agricultural University.

Akio Tanabe, “Vernacular democracy and politics of relationships: A subaltern perspective on contemporary India” Rethinking Religion, Ethics, and Political Economy in India and Sri Lanka: Critical perspectives from Japan Workshop, February 16, 2016, Institute for South Asia Studies, UC Berkeley.

Akio Tanabe “Understanding the South Asian path of development and democratization: Four perspectives on contemporary India” The 9th International Convention of Asia Scholars, Adelaide, Australia. 5th-9th July 2015.

杉原薫 “(Keynote address) The South Asian Path of Economic Development in Global History” Joint Conference on ‘Perspectives, Dialogues and Challenges: India, Japan and the Making of Modern Asia’, 2014年12月13日～2014年12月15日 India Habitat Centre (New Delhi).

Shinya Ishizaka, “Chipko (Forest Protection) Movement in Uttarakhand History”, SNU-INDAS International Conference "Perspectives, Dialogues and Challenges: India, Japan and the Making of Modern Asia" 2014年12月15日～2014年12月15日 India Habitat Centre (New Delhi).

中溝和弥 「経済成長と宗教ナショナリズム：2014年総選挙から見たインド社会」2014年度アジア政経学会西日本大会 2014年11月29日～2014年11月29日 京都大学。

石坂晋哉 「環境、開発、生存基盤—インドにおける森林管理・利用と森林保護運動」第87回日本社会学会大会 2014年11月22日～2014年11月22日 神戸大学。

中溝和弥 Secularism and Federal Space - The

Study of Religious Conflicts in India - INDAS International Symposium “In Search of Well-being: Genealogies of Religion and Politics in India”2013年12月15日 龍谷大学。

SUGIHARA, Kaoru 2012年7月12日 “Developmentalism with Regional Dynamics: Factor Endowment, Industrial Policy and the Quality of Labour in Asia, c.1950-2000” The 16th World Economic History Congress, Stellenbosch University, Stellenbosch (南アフリカ共和国)。

WAKIMURA, Kohei 2012年7月11日 “The Indian Economy and Disasters during the Late Nineteenth Century: Problems of Interpretation of a Colonial Economy”, The 16th World Economic History Congress, Stellenbosch University, Stellenbosch (南アフリカ共和国)。

〔図書〕(計 9件)

Bates, Crispin, Akio Tanabe, and Minoru Mio, eds. 2015. Human and International Security in India. London: Routledge. 189p.

田辺明生・杉原薫・脇村孝平編 2015 『多様性社会の挑戦』現代インド1 東京大学出版会 392頁。

石坂晋哉編 2015年 『インドの社会運動と民主主義—変革を求める人びと』昭和堂 300頁。

Taberez Ahmed Neyazi, Akio Tanabe, Shinya Ishizaka eds 2014 Democratic Transformation and the Vernacular Public Arena in India. London: Routledge. 222p.

杉原薫・脇村孝平・藤田幸一・田辺明生編 『講座生存基盤論 歴史のなかの熱帯生存圏—温帯パラダイムを超えて』京都大学学術出版会 536頁。

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 0件)

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

田辺 明生 (TANABE, Akio)
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科 教授
研究者番号：30262215

(2)研究分担者

杉原 薫 (SUGIHARA, Kaoru)
政策研究大学院大学・政策研究科 教授
研究者番号：60117950

脇村 孝平 (WAKIMURA, Kohei)
大阪市立大学・経済学研究科 教授
研究者番号：30230931

藤田 幸一 (FUJITA, Koichi)
京都大学東南アジア研究所 教授
研究者番号：80272441

中溝 和弥 (NAKAMIZO, Kazuya)
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科 准教授
研究者番号：90596793

石坂 晋哉 (ISHIZAKA, Shinya)
愛媛大学・法文学部 准教授
研究者番号：20525068